

一宮市 博物館 だより

もくじ

展覧会のご案内

- 特別展「縄文から弥生へ～馬見塚遺跡の時代」…………… 2
- 企画展「暮らしの中の民具」…………… 3
- 生誕140周年記念特別展「川合玉堂 ふるさとの風景」… 4
- 歴史探訪 伊勢神宮と伊勢暦…………… 5
- 収蔵品紹介 大倉喜八郎着用 有爵者大礼服(男爵)…………… 6
- 博物館アルバム(平成25年度上半期)…………… 7
- 平成25年度催し物のご案内…………… 8

No.52 2013.10



馬見塚遺跡出土土器棺(『考古学研究』2より転載)

縄文から弥生へ

馬見塚遺跡の時代

平成25年10月12日(土)～11月17日(日)

【休館日】10月15日(火)・21日(月)・28日(月)、11月5日(火)・11日(月)

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

【観覧料】一般400円(320円)、高校・大学生200円(160円)、小・中学生100円(80円)

※()内は20名以上の団体料金

馬見塚遺跡は、大正十四年(一九二五)森徳一郎氏が馬見塚において採集された打製石斧を確認したことに端を発します。翌十五年には合わせ口の土器棺が発見され、学会に報告されました。当時、尾張平野に存在しないと考えられていた縄文時代の遺跡が発見されたことにより、馬見塚遺跡は一躍有名になりました。

それから九十年。現在まで、市による昭和三十八年(一九六三)のF地点の発掘調査、同四十八年の範囲確認調査、平成五年には学術調査が実施されました。また昭和六十年には土層の剥ぎ取りが行われ、その間にも住宅建設に伴う立会調査、さらに多くの人々による遺物採集が行われてきました。

馬見塚遺跡にも見られる土器棺墓は縄文時代晩期後半にあらわれる墓制ですが、特に東海地域では幼児が埋葬されている例が多くみられます。また、ひとくちに土器棺墓といっても、合わせ口だけでなく、土器の破片を組み合わせたものなど、様々な様態があります。

また、馬見塚遺跡からは石冠、石棒、御物石器などの、形の風変わりな、祭祀にかかわると考えられる遺物も多数出土しています。

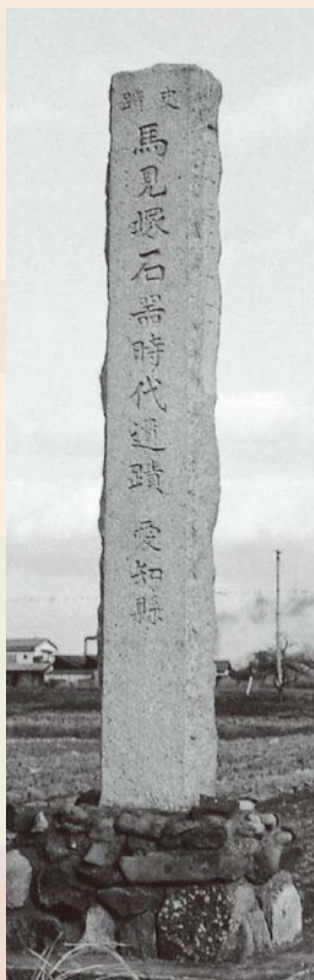
九十年を経て、尾張平野に縄文時代の遺跡が存在することは珍しくなくなりましたが、他の地域に比べると尾張平野の縄文時代の様相は未知であり、研究途上にあります。

本展示では、九十年間の間に出土した馬見塚遺跡の遺物を展示するとともに、同時期の他の地域の出土資料と比較し、縄文時代後晩期から弥生時代にかけての尾張平野の姿を紹介します。

(松本彩)

催事

- 講演会① 10月20日(日)
群馬大学非常勤講師 能登 健氏
「馬見塚遺跡から広がった話―濃尾地震と島畑―」
- 講演会② 11月 3日(日)
東京大学大学院人文社会系研究科教授 設楽 博己氏
「馬見塚遺跡H地点の発掘調査―農耕のはじまりを求めて―」
【時間】午後1時30分～午後3時(午後1時開場)
【場所】妙興寺公民館(整理券が必要)
【定員】150名(先着順)
【聴講料】無料(ただし特別展観覧料が必要)
【申込方法】一宮市博物館にて整理券(当日正午より配付)を受け取り妙興寺公民館へお越しください。
- 共催事業 11月16日(土)・17日(日)
考古学シンポジウム「尾張低地の縄文時代―馬見塚遺跡とその周辺―」(共催:考古学フォーラム)
【時間】11月16日(土)午後1時30分～午後4時30分(午後1時開場)
11月17日(日)午前9時30分～午後3時(午前9時開場)
【場所】妙興寺公民館
【定員】150名(先着順)
【聴講料】無料(ただし博物館入館には特別展観覧料が必要)、資料代(2,000円程度)
【申込方法】当日直接妙興寺公民館へお越しください。
- 体験講座① 10月26日(土) 縄文のアクセサリー・勾玉をつくろう!
- 体験講座② 11月 9日(土) アンギン編みでコースターをつくろう!
【時間】午前10時～正午、午後1時～3時(随時受付、1時間程度)
【場所】一宮市博物館2階学習室
【定員】なし
【申込】不要
【材料費】200円(ただし特別展観覧料が必要)
- 展示解説 10月19日(土)、11月10日(日)
【時間】午後1時30分より1時間程度
【定員】なし
【申込】不要
【聴講料】無料(ただし特別展観覧料が必要)



馬見塚遺跡標柱



馬見塚遺跡出土石棒・石冠
(馬見塚遺跡保存会・一宮市博物館蔵)



馬見塚遺跡出土御物石器(一宮市博物館蔵)



馬見塚遺跡出土土偶(一宮市博物館蔵)

暮らしの中の民具

～観察する～

平成26年1月11日(土)～3月9日(日)

【休館日】1月14日(火)・20日(月)・27日(月)
2月3日(月)・10日(月)・12日(水)・17日(月)・24日(月)
3月3日(月)
【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
【観覧料】一般200円(160円)。高・大学生100円(80円)小・中学生50円(40円)
※()内は20名以上の団体料金



平成24年度の展示の様子



唐箕



脱穀機

平成三年度から始まった、「くらしの道具く今と昔」展。平成二十三年度からは、「暮らしの中の民具」となり、毎年異なったテーマを取り上げ開催しています。平成二十三年度の二回目は「竹細工」で、近世から近代にかけて市内瀬部を中心に制作された竹細工の歴史を、平成二十四年度の二回目は「いちのみやの民俗」で、市内の民俗資料を中心に、「衣食住の道具」をテーマに、現在のように機械化される以前の道具を取り上げます。例えば織物の道具を一つひとつも、アングリ編、薦編などの簡易な織道具から、地機、高機と変化し、明治時代以降になると動力付の織機が生み出されました。また農機具は明治大

正時代から徐々に機械化が進みました。1950年代後半になると「白黒テレビ」「洗濯機」「冷蔵庫」の電化製品を皮切りに、私たちが取り巻く生活道具の機械化がめまぐるしく発展し、現在でも日々進化しています。このように、人々は長い歴史の中で、工夫を凝らしながら、使い勝手のよい道具を生み出してきました。本展示では、機械化される以前の衣食住の道具を中心に、長い歴史の中で、変化を遂げてきた道具をじっくり観察することで、人々が工夫を凝らし、発展してきた姿を考えていきたいと思えます。(神田年造)

期間中の催しもの

- ①1月12日(日) 織物の道具を観察してみよう!
 - ②1月19日(日) 大根切干の道具を観察してみよう!
 - ③1月26日(日) 大工道具を観察してみよう!
 - ④3月9日(日) 民俗芸能公演「島文楽」
- ※詳細は、博物館HP・ポスター・リーフレットをご覧ください。
※名称は変更になることがあります。

生誕140周年記念特別展

川合玉堂 ふるさとの風景

明治六年（一八七三）、日本画家川合玉堂は現在玉堂記念木曾川図書館の立つ地に生を受けました。生誕百四十周年を迎える本年、ふるさとの地で玉堂の描いた日本の風景を振り返りたいと思います。

幼い頃から絵が好きだった玉堂は、十四歳で京都の画家望月玉泉に師事しました。その後、幸野楳嶺門下に移り、京都で若手画家として頭角を現しますが、やがて「芸術上の煩悶」に頭を悩ませるようになります。同門の先輩と夜を徹して画論を戦わせたり、洋画の雑誌を蒐集したりしていた玉堂は、明治二十八年（八九五）四月、第四回内国勸業博覧会において橋本雅邦の描いた《龍虎図屏風》と《十六羅漢図》に出会います。「長い間の煩悶に漸く回答が与えられた」と感じた玉堂は、明るる明治二十九年

には東京に居を移して雅邦に入門します。

雅邦は江戸時代の狩野派の流れを汲み、また西洋絵画の要素を取り入れた新しい日本画を描く画家でした。アメリカ・セントルイス万国博覧会に出品された《林間残照図》では、光と大気に満ちた空間が巧みな水墨技法によって表現されています。

玉堂の《奔瀑遊猿》は雅邦に入門して間もない頃に描かれました。前景の狩野派的な木々や岩肌、右上に広がる水墨のぼかしによる西洋的な空間表現など、雅邦の影響の色濃い作品です。雅邦の指導は弟子の自主に任せるものでしたが、師の技法を我がものにしようと励む若き日の玉堂の姿が感じられます。

本展ではこの二点のほか、晩年の穏やかな農村風景など十数点を展示します。

（成河 端子）



川合玉堂《奔瀑遊猿》 明治三十年（一八九七）
（一宮市立玉堂記念木曾川図書館蔵）



橋本雅邦《林間残照図》 明治三十六年（一九〇三）
（駿府博物館蔵）

【会期】平成25年10月11日（金）～11月13日（水）

【開館時間】午前10時～午後6時

【休館日】10月15日（火）・21日（月）・28日（月）、
11月 5日（火）・11日（月）

【催事】●記念講演会「川合玉堂の風景画の展開」
11月13日（水） 午後2時から3時30分
（午後1時30分開場）

吉田俊英氏（豊田市美術館館長）

●学芸員による展示解説 各回午後2時から
10月12日（土）・16日（水）・19日（土）・
23日（水）・27日（日）・30日（水）、
11月2日（土）・6日（水）・10日（日）

【会場】一宮市立玉堂記念木曾川図書館（入場無料）
一宮市木曾川町外割田字西郷中25
TEL 0586-84-2346

歴史探訪

伊勢神宮と伊勢暦

伊勢神宮

伊勢神宮は、三重県伊勢市の宇治の五十鈴川に鎮座する皇大神宮と山田の原に鎮座する豊受大神宮、別宮など百二十五社の総称です。日本の祖神として、天照大神を祀る伊勢神宮は古くから大神宮と呼ばれ、承平四年(九三四)には参宮人千万という記録があります(『大神宮諸雜記事』)。また式年遷宮の際には、幾千万もの参詣があつたといわれています(『宝治元年内宮遷宮記』)。

さて本年(平成二十五年二〇三三)は、伊勢神宮の第六十二回式年遷宮の年にあたります。式年遷宮とは、正殿、御垣内の建物全て建て替えられることです。最初の式年遷宮は、持統天皇四年(六九〇)とされています。本年の式年遷宮の準備をみていくと、平成十七年の山口祭から始まり木本祭、木造始祭など三十以上の祭事が執り行なわれています。

室町時代になると、伊勢御師の活躍で伊勢講や明神講などの講が全国各地に結成され、多くの人々が伊勢神宮へ参詣、参宮しました。また村々では伊勢御師などによって、神明が勧請され、今日でも神明社としてその名残をとどめています。これは伊勢神宮の祭神、天照大神を祀っている神社のことです。さらに江戸時代になると、全国的に街道・宿場の整備がなされ、それを背景に毎年約五十万人の人々が参宮しました。式年遷宮や御蔭参りがあった年では数百万人に激増したといわれています。御蔭参りは、大集団をなして熱狂的に群参する異様な参拜で、ほぼ六十年周期で発生し、明正十五年(六三三)の夏頃から明確に意識化され、慶安三年(六五〇)、宝永二年(七〇五)、明和八年(七七七)、文政十三年(八三〇)と、爆発的な社会現象となりました。

暦

さて、式年遷宮が行われた最初の持統天皇四年は、暦との関係があります。実際に施行されたのは持統天皇八年ですが、『日本書紀』持統天皇四年十一月十日条には「勅を奉りて始めて元嘉

暦と儀鳳暦とを行ふ」とあり、これは日本で中国暦が施行されたことを示す最初の記事になります。元嘉暦は何承天(かしようてん)が元嘉二十年(四四三)に作り、儀鳳暦は李淳風(じゆんぷう)が作った暦です。その後、大衍暦、五紀暦、宣明暦など中国の暦が導入されるようになります。

伊勢暦

室町時代になると、地方では仮名の版暦が出版されるようになり、最も有名な暦として「伊勢暦」があります。鎌倉時代頃から伊勢御師と呼ばれる人たちの活躍により、伊勢信仰は庶民にまで広がるのと同時に暦が庶民生活に浸透していき、この御師が神宮で大麻(御札)をいただき、全国各地の檀家へ配布する時、伊勢の土産物として配られていたのが伊勢暦でした。伊勢暦が作られる前は、丹生暦が配られていました。

丹生暦とは、伊勢国多気郡丹生(現三重県多気郡多気町)で賀茂杉大夫によって発行された暦です。その後、伊勢でも暦が作られるようになると伊勢暦が主流となり、江戸時代には全国的に普及しました。

伊勢暦の起源は、寛永八年(六三三)に陰陽師森若大夫(箕曲甚大夫)が開暦したものとされています。伊勢御師たちは、それぞれ馴染みの暦師から暦を仕入れ、檀那場へ持参し頒布していました。

伊勢暦の特徴は、折本仕立て、八十八夜や二百十日といった日常生活に役立つ暦註(節季吉凶など)が記載されていることです。また檀那は、大名から庶民にいたるまで様々な階層にわたっていたため、大麻、暦も数多くの種類が作られ、初穂料によって頒布される暦の種類が異なっていました。

当時の人たちは、暦を手にするまでは、一年の日数も分らず、暦はとても重要なものでした。伊勢暦は、伊勢神宮の暦であるという信仰と信頼に裏付けされ、御師たちによって毎年配布されていたため、人気が高かったようです。江戸時代後半になると、全国

各地で伊勢信仰の高揚と伊勢講の増加などにより、伊勢暦の頒布数が増加し、約二百万部に達したとされています。

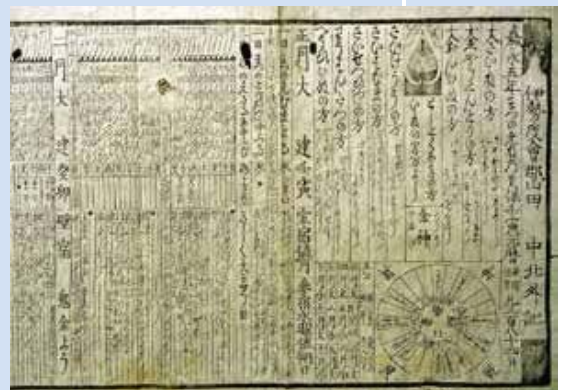
館所蔵の伊勢暦二千九点(天保十年〜明治五年)には中北外記、飛鳥帯刀、瀬川磐雄などの暦師の名がみられます。

これらの暦師は、外宮の山田町に店を構え「暦あり」という看板や、「暦屋」という暖簾を掲げていたとされています。伊勢では売暦は禁止となっていたため、伊勢御師を通して、大麻とともに配布されていました。

明治新政府の政策によって、明治四年(八七二)に御師の制度が廃止されるとともに伊勢暦の配布も姿を消しましたが、明治十六年に官暦が神宮司庁から発行されることになり、現在でも伊勢暦は「神宮暦」として毎年発行されています。(石黒 智教)

参考文献

- 岡田 芳朗「証上講演 暦から読み解く日本人の心」
(特集「日本人の靈魂観と慰霊」明治聖徳記念學會紀要 復刊第四四号、二〇〇七)
- 「特別企画 地方暦総覧」
(『歴史読本』十月号、新人物往來社、二〇二二)
- 中山 和久「巡礼・遍路がわかる事典」
(日本実業出版社、二〇〇四)
- 林 淳「天文方と陰陽道」
(日本史リブレット四八、山川出版社、二〇〇六)
- 『参宮 遷宮 伊勢神宮』(霞会館、二〇〇九)



嘉永五年(一八五二)「伊勢暦」冒頭部分
(一宮市博物館蔵)

収蔵品紹介 大倉喜八郎着用有爵者大礼服(男爵)

当館所蔵の毛織物コレクションの中に、大倉財閥の創設者大倉喜八郎の大礼服が四点あり、そのうちの三点は、襟の内側にある商標から三越で仕立てられたものであることが分かります。日本での本格的な洋装は明治五年(八七)十二月十二日の文官大礼服制定に始まるといわれ、この日は「洋服記念日」になっています。

日本の洋装の始まりと大倉喜八郎、そして三越の関わりを振り返ってみたいと思います。

政商・大倉喜八郎

大倉喜八郎は天保八年(八三七)、現在の新潟県新発田市の質屋を営む名家に生まれました。初め乾物店として独立しますが、横浜で蒸気船を見て時代の変化を感じ取り、慶応三年(八六七)には鉄砲店を開業します。慶応四年には官軍に兵器食糧を納入するようになり、政商としての生涯をスタートさせます。明治四年(八七)には、日本橋本町に洋服裁縫店、横浜に内外貿易店を開きました。海外から輸入した羅紗(毛織物)毛布の販売



大倉喜八郎着用 有爵者大礼服(男爵) 大正~昭和初期 (一宮市博物館蔵)

売を主とし、洋服の注文があれば雇った外国人に仕立てさせる商

売で、日本初の洋服仕立業であったといわれています。同時期には新橋駅や銀座煉瓦街の建設工事なども請け負い、建設業にも進出していきました。明治十六年(八八三)の鹿鳴館、明治四十四年(一九二)の帝国劇場の建設も大倉喜八郎の采配によりです。

明治五年には欧米の商業視察に向かい、英国各地の毛織物工場を熱心に巡っています。明治になり、軍服や官服を洋装に改めていくなかで、毛織物の国産化を目指していた内務卿・大久保利通の構想もあり、明治十二年(八七九)には日本初の毛織物工場・千住製絨所が設立されました。計画段階から喜八郎も積極的に参画し、開業後は大倉組に払い下げられる計画もありましたが、専ら軍用品を生産していたこともあり、官営のまま大倉組が原毛の納入と製品の販売を引き受けることになりました。

今日は帝劇、明日は三越

三越は延宝元年(二六七)に伊勢商人三井高利が江戸本町に呉服店「越後屋」を開業したのに始まります。その後両替店を併置するようになり、



三越の商標

明治八年(八七五)には日本初の民間銀行「三井銀行」を発足し、専ら金融業を中心に三井財閥を形成するようになり、その頃には本業だった呉服屋は維新の波に乗り遅れ、経営不振に陥っていました。そんな折りに、明治

十九年(八八六)ライバルの白木屋が英国人のミスカーチスをデザイナ―兼技術者として洋服部を開設。三越も洋装ブームに押され、大番頭一人をパリに派遣して洋服修行させ、明治二十年(八八八)にフランス人の仕立職人ホフマン夫人とその娘を招いて三越洋服店を開店させます。明治三十七年(九〇四)には有名な「デパートメントストア宣言」を東京日日新聞に掲載し、呉服店から百貨店へと経営を転換させていきます。明治四十四年の帝劇開場の際には「今日は帝劇、明日は三越」の広告コピーを発表し、モダンで優雅な憧れの場所という位置を築いていきました。また、三越は当時の文化人のサロンでもありました。伊藤博文や井上馨、東郷平八郎といった明治の元勳や陸海軍の将軍を顧客に持ち、元禄会というサロンを設け、新渡戸稲造や佐佐木信綱といった知識人を招いて座談会を開き、情報収集の場を提供していました。

当館所蔵の大倉喜八郎の大礼服は金モールも鮮やかで、前は金色の飾りボタンの裏の隠しボタンで留めるなど、凝った仕立てになっています。喜八郎が男爵位を授爵した大正四年(九一五)以降の製作と思われるが、日本橋の三越で友人らと談笑しながら仕立てたものかもしれません。(成河 端子)

主な参考文献

- 刑部 芳則『洋服 散髪 脱刀 服制の明治維新』講談社選書メチエ、二〇〇〇
- 中山 和久『大倉喜八郎の豪快なる生涯』富思社、一九九六
- 林 洋海『三越をつくったサムライ 日比翁助』現代書館、二〇三三

平成25年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

特別展 縄文から弥生へ〜馬貝塚遺跡の時代

10月12日(土)〜11月17日(日)

企画展 2013 宮市現代作家美術秀選展

11月30日(土)〜12月15日(日)

第71回 宮市美術展の成果を受けて、
宮市美術展依頼出品者、市長賞受賞者、
宮美術作家協会・宮書道協会・宮写真
協会推薦者の作品を展示します。

企画展 暮らしの中の民具

1月11日(土)〜3月9日(日)

講座・公演

講座 市民文化財めぐり

11月12日(火)

講座 尾張平野を語る18

2月2日(日)・9日(日)・16日(日)・23日(日)・3月2日(日)

公演 民俗芸能公演

3月9日(日) 13時30分より

特別展 玉堂記念木曾川図書館
川合玉堂 ふるさとの風景

10月11日(金)〜11月13日(水)

※会場は、二宮市立玉堂記念木曾川図書館です。

平成26年 博物館講座

【日時/講師】

●2月2日(日)

東京文化財研究所保存修復科学センター
伝統技術研究室室長 北野信彦氏
東京文化財研究所保存修復科学センター
主任研究員 犬塚将英氏

●2月9日(日)

京都工芸繊維大学美術工芸資料館
研究員 佐々木良子氏

●2月16日(日)

東京国立博物館学芸研究部付日本工芸研究担当
上席研究員 池田宏氏

●2月23日(日)

鶴見大学文学部文化財学教授 小池富雄氏

●3月2日(日)

寺本文化財工芸社甲冑師 寺本靖氏

【時間】各回とも午後1時30分〜午後3時

【会場】一宮市博物館講座室

【定員】各回先着100名(当日整理券配付)

【聴講料】無料、ただし常設観覧料が必要

※詳細な演題と日程は、博物館HP・ポスター
リーフレットをご覧ください。

尾張平野を語る18

2月2日(日)・9日(日)・16日(日)・23日(日)・3月2日(日)

この講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野一特に尾張平野について考えてきました。

18回目となる今回は、「仁王胴具足の謎に迫る」をテーマに、仁王胴具足の調査研究の成果などを報告します。



仁王胴具足



仁王胴具足調査風景

〈博物館からのお知らせ〉

常設展示リニューアル工事のため、平成26年3月11日(火)から9月末まで、臨時休館いたします。

一宮市
博物館
だより

第52号

発行日/平成25年10月5日
編集・発行/一宮市博物館
印刷/三井堂株式会社

利用案内

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日

【開館時間】午前9時30分〜午後5時(入館は4時30分まで)

【観覧料】(常設展・聴講料含む) 一般200円(160円)、
高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)

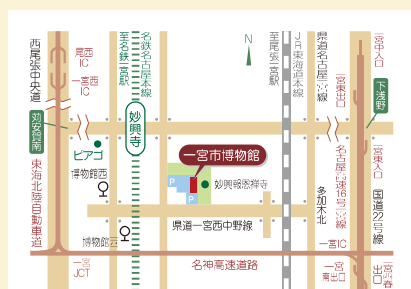
※()内は20人以上の団体料金

※一宮市内小・中学生は無料

※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的
機関発行の証明書等を提示された方は無料

※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216
URL <http://www.icm-jp.com/>



【交通】名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
二コニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分